

大衆文化と民衆文化

そしてポピュラーカルチャー

土居 浩

新たに運営委員の一員となりました、土居浩（どい・ひろし）と申します。これまで立教大学とはほぼ無縁だったのですが、ひよんなことから関与することになりました。ご挨拶代わりにはここでは、いかなれば大衆文化研究センターの〈外様〉視点から、「大衆文化」の「大衆」について作文いたします。

委員になつてすぐでしたか、たまたま眺めていたウェブ上の資料に「大衆」の文字がありました。二〇一六年の師走も押し迫った時に発表された、中央教育審議会による学習指導要領についての答申です。より細かく述べると、新たに高校の必修修科目とされる「歴史総合」に関する図（俗にいう「ペライチ」の「お役所ポンチ絵」⇨パワーポイントで作られた資料）の中に、「大衆化と私たち」「大衆社会の形成」等々の文字列が並んでいたのです。基になる答申の摘要を試みますと、高校「歴史総合」とは、「近現代の歴史」を「理

解」し「考察」させる科目です。その構成は、「近現代の歴史の大きな転換」であるところの、「近代化」「大衆化」「グローバル化」の三つに着目させます。このうち「大衆化」では、「大衆の社会参加の拡大を背景として人々の生活や社会、国際関係の在り方が変化してきたこと」を扱います。図（答申の別添3-18）には、時期区分を示す記入も、確認できます。「近代化と私たち」は「：18世紀後半～現在」、「大衆化と私たち」は「：19世紀後半～現在」、「グローバル化と私たち」は「：20世紀後半～現在：」になります。なおこの「：19世紀後半～現在」については、「大衆の参加の拡大が社会全体の在り方を規定するようになりはじめた」と書かれていますから、これが「大衆社会の形成」を意味するのでしょうか。つまるところ、ここで「大衆」を冠する用語である、「大衆化」「大衆社会」等々は、特定の時代・時期で生じた現象を指し示すこととなります。さらに

は、この場合の「大衆」とは、massの訳語だと、思い至ります。

あらためて、大衆文化研究センターの「大衆」とは、何を指し示すのでしょうか。その内部で深く関わってきた方々にとっては、あるいはすでに決着済みのことかも、しれません。でも（外様）から眺めれば、ひとまず手がかりとして公式サイトにたどりついて、この小文を書いている現在、どのページにも「大衆文化」あるいは「大衆」の定義は、見当たりません。かろうじて、それも外部の学術雑誌DB経由で、センターの刊行物である『大衆文化』の英訳が、どうやら Popular cultureらしいことが、うかがえるのみです。massとpopularそれぞれの概念の違いを、どれほど意識しているのか。あるいは、気にしていないのか。違いを意識した上で、あえて「大衆」の定義を外部には明示していないのか。それとも、「大衆」の定義云々について、わざわざ物言いをつけるような輩は、そもそも相手にしていないのか、等々。一番最後の邪推が、じつは核心を突いているようにも思えますが……。

ちなみに私自身は、popular cultureの訳語としては、すぐに「民衆文化」が浮かびます。「民衆文化」と「大衆

文化」、そしてカタカナ表記の「ポピュラーカルチャー」も並べてみれば、それぞれ微妙に重なりつつ、基本的にその意味するところは、ズレているのです。たとえば先ほどの「歴史総合」でいう「大衆化」「大衆社会」を、「民衆化」「民衆社会」に置換することは、できません。それは用語としての「大衆」「民衆」それぞれの、すでに包摂している含意が、単純な置換を許さないからです。このセンターに関わったことを契機として、しばらく「大衆」と「民衆」そして「ポピュラー」等々の、重なりつつズレる関係性について、具体的現場を踏まえて考察したいと思います。今現在ちょっと気になっているのが、「大衆酒場」と「民衆酒場」の違いです。詳しい方おられましたら、よろしく具体的現場をご教示ください。

土居 浩（ものづくり大学准教授）